20230430　朝礼拝　詩編 64 編

「言葉で創る平和」

先日の墓前礼拝以来、私の父親の話を度々しておりまして恐縮なのですが、今日も、ちょっと父の話をしたいと思います。私の「史季」という名前は、父が考えくれました。歴史の「史」に、季節の「季」と書いて、「ふみき」と読ませるわけですが、その由来を聞いてみると、父はアントニオ・ヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲である「四季」の、さらに「冬」が好きなんだそうです。「四季」と言うのは、春夏秋冬のことですね。ヴィヴァルディの「四季」のうち「春」という曲は、卒業式や入学式でよく用いられたりもします。しかし、そういう明るく穏やかな「春」ではなく、寒々しい吹雪や日が隠れるような薄暗さがある「冬」が好きなんだ、というあたりが、父らしいような気がします。で、その「四季」という言葉から漢字と音をもってきて、あと、父は高校で歴史を教えていたので、歴史の「史」の字を「四季」にあてがい、読み方を変えて、「しき」ではなく「ふみき」と読ませたのが、私の名前ということです。ただ、私は小さい頃、この「史季」という名前が嫌いでした。実をいうと正直、今でも、それほど好きと言うわけではありませんが、昔は、「ふみきり」とか「つみき」とか揶揄われて、嫌な思いもしたものです。同じ学校に史子さんがいましたので、当時の友人たちの実に子どもらしい無邪気な発想で、史子さんに迷惑をかけたこともあります。もちろん、私も迷惑でしたが・・・。

あと、最近聞いたんですが、父曰く私に「史季」とつける前に、「そう」という名前候補があったんだと言います。「有岡そう」。んー、今となっては、それもそれで違和感が拭えないんですけども、この「そう」という名前は、今回の説教題にも含めました「創る」という字を当てるつもりだったんだとか。「創造する」「創作する」あるいは「創世記」の「創」ですね。ちょっとクリエイティブ

な感じがする名前にしたかったということです。でも、この「創」という名前は無しになりました。理由は、「創」という字には、作り出すという前向きな意味もありますが、「傷」という意味もあるからだと言っていました。「切る」という字に、「創」と書いて、「切創」と読み、これは切り傷のことです。同じように「刺す」という字を当てて「刺創」と読み、これは刺し傷ですね。「絆創膏」という字にも、「創」の字が入っています。最終的に、この「創」という字が持つ「傷」という意味を、父は許容できず、私は「史季」という名になったのでした。

というような、私の父と、私の名前の話は、これくらいにして、日本語において「創る」という言葉に、「傷」という意味が含まれ得ることは、意味深な気がします。「創」という字の、「傷」という側面を強調して考えるなら、聖書の最初に収録されている「創世記」の意味も随分と変わってきます。新しく何かを作り出す「創造」や「創作」という言葉も、ただただ前向きな意味だけではなく、そこに何らかの「傷」や、「痛み」が伴うことも織り込まないといけないのかも知れません。

最近、人工知能の話題が盛り上がっていますが、人工知能は決して「無」から「有」を生み出す全能な存在ではありません。人間の創作物を「深層学習」という処理をした上で、膨大な数を記憶し、そのパターンや仕組みをものすごい回数で組み換えたり、繋げたりして、新しい形を表現しています。つまり、人工知能は、人間の創ったものを基礎にして、新しいものに「作り替えている」に過ぎません。だから、本当にクリエイティブな活動をしている人たちは怒るわけです。創作活動に伴う「傷」や「痛み」を知る人たちは、人工知能によって「傷」もなく「痛み」もなく、易々と新しい「創作物のようなもの」が生み出されている現実が我慢ならないんですね。作り手の権利を保証する、著作権の保護という法律も、突き詰めれば、何かを初めて創り出し、生み出した人の、その苦労や疲労という「痛み」であったり、腱鞘炎とかペンダコとか肩こりとか、そういう実際の「傷」に対して、敬意を払い、その心と体を削った努力を尊重し、守ろうというお約束なのだと思

います。「産みの苦しみ」とも言ったりしますが、それは本当にその通りで、何かを創ったり、始めたりするのは、傷だらけになる苦痛を負うものです。

聖書的な事実に目を向けるなら、神様も「創世記」において、世界を創り出したことで確かに「痛み」や「悲しみ」を感じるようになりました。アダムとイブが神様の言いつけを守らず、エデンの園に居られなくなったこともそうですし、アダムとイブの子どもである、カインが早速、弟であるアベルを殺してしまうという兄弟殺しの一件も痛恨の出来事でした。そして、その後の神話から伝説を経て、私たちが調べて確かめることができる歴史に至るまで、神様は人間の為した様々な出来事に心を痛め、傷ついていると言えるでしょう。でも、それは全部、あの時、神様が世界を創り出したからに他なりません。神様であれ、我々人間であれ、「何かを創り出し」「何かをやり始める」ことは、痛くて苦しいものなのだということです。

そして、その痛みや苦しみや傷というものは、「平和を創り出す」という全然痛くなさそうな営みに対しても例外じゃないと思います。私だけが痛くない「平和」は、それは本当の意味で「平和」ではありません。身近なところにおいても、世界に目を向けても、「平和を創り出す」ためには、自他共に何らかの負担を受け入れ、耐え忍ぶことは避けては通れないでしょう。例えば、作り手の人権や安全に配慮したフェアトレードの品物を買おうとすると、若干お高くなるのは致し方ないことで、そういうお財布の痛みは受け入れる必要があるかも知れません。あと、最近の世界情勢を考えるなら、チリ産とロシア産の塩鮭があって、ロシア産の方が安くても、ここはチリ産を買うべきか、みたいな。でも、そうすることで、自分のお財布も痛いですが、ロシアの漁師さんや加工業者も損失を被るなら、やはり「平和」は痛みなしには実現しないとも言えます。他にも、食品ロスを減らすことで、自然環境が良くなるならば、少々賞味期限の近いものを選び取ることも大切でしょう。SDGｓというものを本当に実践し、効果のあるものにしたいならば、便利さとか豊かさを我慢

することも受け入れないといけません。私だけが痛くない「平和」は、なかなか難しいですね。

考えてみれば、昔の「平和」は単純でした。銃弾が飛んでこず、刃が振り下ろされないなら、それは「平和」でした。でも、今の「平和」は、私たちの経済活動と密接に結びつき、格差の是正、環境の改善、国際関係という大きなものから、隣近所やネット空間での和解と調和などなど、非常にまどろっこしくなってしまいました。銃弾が飛んでこず、刃に傷けられることはなくなっても、経済格差に苦しめられ、自然環境の変化に翻弄され、そして、溢れる情報や、言葉の鋭さに、命の危険を感じることがあります。危ない暴力が淘汰され、安全になった分、細やかなところでの痛みや苦しみが可視化され、敏感に感じられるようになりました。どんどん「平和」であることのハードルは高くなり、私たちは際限のない改善努力と平和の使者としての役割を負わされています。でも、そもそもキリスト教は、神様の国のような全き平和を追い求める共同体です。私たちのゴールは、もともと遥か遠くに設定されているということです。

そういう意味では、今回の聖書個所は示唆に富むものであると言えます。今日の聖書個所である詩編 64 編は、「敵の脅威からわたしの命をお守りください」と訴える、危険な状況を歌っています。命が危ないほどの脅威が迫っている。しかし、その敵には武器はなく、銃も刃も弓も槍もありません。この敵は「舌を鋭い剣とし、毒を含む言葉を矢としてつがえ、隠れた所から無垢な人を射ようと構え」ていると言います。簡単に言ってしまえば、この詩編 64 編は、「言葉の暴力」による命の危険を訴え、そこから逃れさせてくださいと祈る、そんな歌だということです。私は、この詩編 64 編を読んで、未だに度々ニュースになる「インターネット上の炎上事案」みたいだな、と思いました。歴史から学び、暴力を抑え、努めて平和であるために社会制度と教育環境が整えられてきましたが、まだ「言葉の暴力」は克服できていません。私自身、これは本当に難しいと、自分の事として感じています。私も、良くない言葉やキツイ言い回しを使ってしまい反省したり、後悔し

たりすることばかりです。私たちは体を傷つける武器を放棄しましたが、まだ心や魂を傷つける「言葉の暴力」を克服できていないのだと思わされます。むしろ情報技術の発達で、原初の時代から抱えていたであろう「言葉の暴力」が露見しやすい時代を迎えています。6 節にある「彼らは悪事にたけ、共謀して罠を仕掛け「見抜かれることはない」と言います」という指摘は、そのまま匿名性を盾に乱暴さを増すインターネット上の炎上事案を予言しているようでもあります。また、3 節の「わたしを隠してください、さいなむ者の集いから、悪を行う者の騒ぎから」とは、この情報化社会にあって、言論闘争や誹謗中傷から簡単には逃れられない現実を嘆いているようでもあります。キリスト教が掲げる「神の国の実現」という、平和を創り出すための奉仕を続けていく上で、最後まで難しい課題として残るのは、「私たちは私たちの言葉をどのように取り扱うか、どのように言葉と向き合うか」ということかも知れません。

自分の言いたいことではなく、言いたくないことを言わないといけない、となれば、自分の心は疲れて痛みを覚えます。また、聞きたいことではなく、聞きたくないことを聞かないといけないなら、やっぱり自分の心は疲れて痛みを覚えます。でも、「耳の痛い話だ」と自分が認めるものは、往々にして聴く必要のあるものですし、本当に相手のことだけを考えて言葉を紡ぐなら、それは苦労して当然です。建設的で平和を創り出す言葉のやり取りは、その安らかな目的は裏腹に、自分を律し、自分に痛みを強いる側面があることも認めないといけません。こうやって語っている私自身、今どれだけ自分に無理難題を課しているのかと考えると、気が遠くなりそうです。「そういうなら、まずはおまえが実践しろ」ということですね。でも、言葉は大事です。良い言葉をお互いに語り合うためには、平和を創り出す言葉を語り合うためには、私たちは心と魂を削る思いをして一言一言を紡ぎだすことを避けてはならないと思います。人工知能にはできない、人間だからこそ創り出し、紡ぎ出せる、産みの苦しみを経た言葉の価値を、私たちは知っていたいと思います。

私の説教や、園長だよりや、聖書研究というものは、拙い二次創作物に過ぎませんが、私が、そういう「言葉の積み重ね」の下地として、必ず聖書を置いていることは、知っていて欲しいと思います。この聖書は、数千年前に「産みの苦しみ」で紡がれた言葉であり、そして、ユダヤ教・キリスト教の歴史において多くの人々の祈りと願いによって磨かれてきた言葉です。この聖書には、悦に入った気持ちの良い言葉はほとんど出てきません。その大部分は、反省と後悔であり、また、自分ではなく神様を賛美し、自分を超えた存在に希望を委ねるための言葉です。他者のために痛みを覚え、平和のために傷を負いながら、この聖書は、今に至るまで継承され続けてきました。その歴史と実績を、どうか心の片隅に置いていて欲しいと思います。私たちが信じている全知全能の神様というのは、言い換えれば、完璧な理想像ということです。「こうでありたい」という永遠の目標です。キリスト教は、愛情豊かな神様という永遠の目標を見つめながら、自分の行いを反省し、少しでもこの世界のために、隣人のためにと祈り歩んできました。その信仰の歩み中で生み出された言葉の数々が、聖書という形をとって、今、私たちの手元にあります。まぁ、時代が古い分、現代の感覚には合わない部分も多々ありますが、でも、本当に人と人との平和を望むのであれば、聖書は読む価値があると私は思います。

私たちは聖書に書かれた痛みや傷に敬意を払いつつ、私たちも丁寧な言葉を紡いでいきたいと思います。大げさではなく大真面目にですが、私たちが、隣人や家族や子ども達に語る、その言葉の一言一言が、明日の平和を創り出すと信じて、祈りつつ共に歩んで参りたいと願うものであります。

お祈りを致します。

神様。

今日も私たちために、尊い安息日を備えてくださり、感謝致します。あなたは、私たちの日々の働きを祝福してくださり、そして、週毎に休息と安らぎを備えてくださいます。過ぎました１週間のお守りを感謝する共に、今日から始まる新しい１週間も、どうか喜びを見出し、楽しさを分かち合うことができますように、あなたがそばにいて守り導いてください。そして、私たち一人一人が平和を創り出す者として、あなたに用いられ、社会の中で、教会の中で、幼稚園の中で、家庭の中で、あなたの愛と慈しみを示すことができますように、私たち支え導いてください。大きな大人から、小さな子ども達に至るまで、すべての人たちが、あなたの愛に触れ、安心して過ごすことができますように。私たちのありのままを認めてくださる、あなたの御心を賛美することができますように。お守りください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。